

もう午後四時を回っており、先行

者もいることだろうし、この時間からでは釣れるわけはないと思いつらも、仕度をして沢に降りてみた。

降りてみると、この日照り続きで沢の水量は極端に少なく、釣れそうなポイントはほとんど無い。それでややひんやりとする沢を、楚々とした風情の野草などを眺めながらのんびりと登りはじめてみた。

途中二、三のポイントで竿を出してみると、案の定当たりは無い。

ふつと足元の石を見ると、水に濡れた人の足跡がある。すぐ前に先行者がいる様子である。これでは釣りにはならない。帰ろうかと思つたがもう少し涼を楽しみたかったし、先行者の釣果も気になつたのでさらに登つてみた。

すぐには三人の人影が見えてきた。

一人は女の子でビクを持っていた。あとの二人は盛んに石にへばりつき、ずぶ濡れになつて何やらやっている。近寄つてみると素手で岩魚を捕まえているのである。

あいさつを交わし、ビクを覗いてみるとなんと四十センチ近い岩魚が一匹と三十センチ近い岩魚が二匹、その他に二十センチ級が数匹いる。びっくりしたのと巨大岩魚の美し

い姿に出会つて声もでない。

岩魚を追い求めている者でないとわからないのかもしれないが、一度は釣りたいと思う大物。感激である。

三人連れは、おじいちゃんに連れられた孫二人であった。

一人は中学三年生の女の子、もう一人は小学六年生の男の子であつたが、その三人連れからは、何とも言ひがたい微笑ましさが漂つているのである。いい感じなのだ。

そこにおじいちゃん（お孫さんが

ただく）からは、「今年は水が少なく釣りはだめ、一緒に撫み取りをやりませんか」という誘いである。

また、驚いた。なぜなら釣りにしても魚取りにしても、自分の領域に赤の他人が入り込んで来るのを極力嫌うはずなのだが、このおじいちゃんと孫二人はニコニコしながら一緒にやろうと言うのである。

あの巨大岩魚を見せられてからは私にためらいはない。二つ返事で傍観者から仲間に変身した。

しかし、撫み取りの準備はしていない。直ぐに温泉街にもどり、軍手を買い求め、沢を登つて合流した。

一緒に始まつたものの、私の手に魚は当たらぬ。おじいちゃんに連れられた孫二人で、おじいちゃんは「せつか

種々の手ほどきを受けたが、そんなに簡単にはいられないらしい。

もう六時近い。それから約一時間、男三人の岩魚撫みが始まつた。さすがにおじいちゃんがうまい。小学生の孫も最近大分捕れるようになつた。

このお孫さん一人も、おじいちゃんの姿を見て育ち、きっとおじいちゃんのような心の持ち主になるのだろうと思うと、ひとりでに心が和み、二人の顔を見て微笑まずにはいられなかつたのである。

家路についたのはもう七時を回つていた。

夕食をしていると、電話がなり、いて弟に指図している。

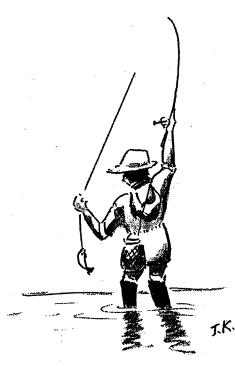
結局私は、おじいちゃんが石の下の奥深いところで押させていた岩魚を「感触を味わつてみな」と言われて撫ませてもらつたのが最初で、自分で撫んだのは一匹だけであつた。

沢から上がるとき度は、捕つた十数匹の岩魚を全部持つていけとう。なんという人たちなのだろう。見ず知らずの私に、川を案内し、魚の捕り方を教え、捕つた魚を全部持たせてくれるおじいちゃんと孫二人。

私はこの二時間の間に、人の出会いの大切さ、失いかけていた本物の親切心や家族の絆の大切さなどを再

確認せざるを得なかつた。

三人の温かな心に触れ、私自身の心が洗われると同時に、頭の中はすがすがしさでいっぱいになつてい



保健体育課主任指導主事兼保健係長